

## 黙示録7章 「イスラエル人のしもべたち」

### 1A 神の僕たちの印 1-8

1B 災害を押しとどめる天使たち 1-3

2B イスラエル十二部族 4-8

### 2A 大患難から抜け出た人たち 9-17

1B 救いを喜ぶ大群衆 9-12

2B 神の前にいる慰め 13-17

## 本文

黙示録7章を開いてください。私たちは、6章から患難の時代に入っています。永遠の神の御座があり、そこに小羊が近づいて来て、七つの封印を受け取られました。そのことで、世界を贖うため、この世を支配している悪魔から奪還し、神の国を立てます。そして私たちは、その封印の六つを小羊が解かれたところを読みました。初めの四つは、四頭の馬です。初めの白い馬は、征服から征服へ、キリストのような救いをもたらすようであり、実はその後続く、戦争、飢饉、そして死をもたらす偽キリストであることが分かりました。そして第五の封印は、祭壇の下にいる魂が叫んでいました。彼らは、患難時代の中にいて、殉教した魂です。彼らは、そのような流血に対して神の正しい裁きが行なわれることを願いました。けれども、このように言い渡されました。「6:11 すると、彼ら一人ひとりに白い衣が与えられた。そして、彼らのしもべ仲間と、彼らと同じように殺されようとしている兄弟たちの数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいるように言い渡された。」7章は、これらさらに殺されていく人々が、天に入れられていく情景を読んでいきます。

そして第六の封印が解かれると、太陽や月に異変が起こり、天の星も地上に落ち、それから大地震が起こって、それでそこにいる人々が叫びます。「6:16-17 私たちの上に崩れ落ちて、御座に着いておられる方の御顔と、子羊の御怒りから私たちを隠してくれ。17 神と子羊の御怒りの、大いなる日が来たからだ。だれがそれに耐えられよう。」父なる神と小羊の怒りを、彼らは受けています。その方の前には立っていることはできない、耐えられないと叫んでいます。私たちが、怒れる神の前に立つことは、恐ろしいことです。「ヘブル 10:31 生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。」しかし、私たちは7章において、主の前に出て賛美し、感謝している人々の姿を読みます。同じ主の御座であっても、ある人にとっては怒りであり、またある人にとっては喜びなのです。

### 1A 神の僕たちの印 1-8

1B 災害を押しとどめる天使たち 1-3

<sup>1</sup> その後、私は四人の御使いを見た。彼らは地の四隅に立ち、地の四方の風をしっかりと押さえて、地にも海にもどんな木にも吹きつけないようにしていた。<sup>2</sup> また私は、もう一人の御使いが、日の昇

る方から、生ける神の印を持って上って来るのを見た。彼は、地にも海にも害を加えることを許された四人の御使いたちに、大声で叫んだ。<sup>3</sup>「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を加えてはいけない。」

ヨハネは、地上に下る災いの幻を見せられましたが、これらのことが起こっている中で、また別の側面で起こる出来事について、幻を見せられています。四人の御使いがいます。「地の四方の風をしっかりと押さえて」いるとありますが、四方という表現は地の全方向、東西南北の全てということです。(エゼ 7:2 参照)今、神の裁きが海や木に対して全土に対して下ろうとしているのですが、それを御使いが引き止めているということです。

このようにして、神がご自分の災いを引き止めるという働きがあります。ロトがソドムを出て行くまでは、主はそこに火を振らせることはありませんでした。また、テサロニケ第二 2 章によれば、不法の人の現れ、つまり反キリストが現れるにも、引き止めるものがあるので、不法の秘密が働いていても現れていないという説明がパウロにありました。これは教会の携挙によって取り除かれますが、教会が神の救いを伝えていて、その働きが終わるまで神はご自分の怒りを地上に現すのを引き止めておられます。今、患難の時代に既に入っています。神は教会ではなく、神の印を押されたしもべたちによって、ご自分の救いを完成されようとしています。その印を押してしまうまで、さらに災害を加えるのを留めておられています。

この四人の御使いは、8 章に現れます。第七の封印を小羊が解かれると、七つのラツパが吹き鳴らされます。そこでは、木の三分の一が焼け、海の三分の一が血となり、地上では川の水が汚染されます。聖書において昔から、東からの風によって、いなごの襲撃がエジプトにあつたりと、風によって災いが下りましたが、その風を御使いが引き止めています。私たちは、自分たちが生きている中でも、天候や気候が不順であることに既に気づいています。神は少しずつ、ご自分が将来、何を行われるのか、注意喚起をされているようです。毎日が、比較的安定した天候が与えられているというのは、当たり前のことではなく、神が敢えてそれを行われているのです。それを取り除こうと思えば、いくらでも、今からでもすぐに行なうことがおできになります。「今、起こっていないのは神の憐れみがあるからだ。」ということを知る必要があるでしょう。

そして、この四つの御使いは異なる別の、力ある御使いが日の上るところから出て来ています。なぜ、「日の昇る方」という方角、つまり東からであります。黙示録の中にも、東のほうからやって来る御使いの活動が記されています。9 章 14 節で、ユーフラテス川のほとりに四人の御使いがつながられていることが書かれていますし、16 章に同じくユーフラテス川に鉢を御使いがぶちまけて、それで日の昇る方から全世界の王たちがやってくるのが預言されています。これらは災いがやって来る方向なのですが、ここ 7 章では、「ちょっと待て！まだ災いを下してはいけない。」と待ったをかけて、やめさせている声であります。ちょうど敵に銃口を向けて攻撃をしようとしてい

る部隊に、上司が「やめろ、まだだ！」と止めているような状況でありましょう。

そして、「神のしもべたちに対する印」であります。ここから、黙示録に出て来るテーマの一つである「印」があります。8章において第七の封印が解かれる幻が始まりますが、9章では、いなごのようなものが、さそりの力をもって出てきて、人々が苦しみに悶えるようにさせますが、「額に神の印を持たない人たちには加えてよい、と言いつ渡された。(4節)」とあります。そして14章において、小羊がシオンの山に下りてこられて、そこで新しい歌を歌っている地上から贖われた神の僕たちの姿が出て来ます。患難時代の初めに、神の印を押されて、それであらゆる害から守られて主の再臨のお姿に見えることができる、選ばれた人々です。その反対に、偽物も出て来ます。獣の国においても刻印があり、その住民は全て右の手か、その額に刻印を受けさせられます。それは獣の名を表す数字であり、六百六十六であるとあります。印を押されていない者は殺されますが、しかし獣の印を持っている者は後に神ご自身によって苦しみに遭います。

エゼキエル書に、神の印を押されている人々がいます。神殿で偶像礼拝をしていることを悲しんでいる人々です。その人には額に印をつけ、その他の人々を滅ぼされます。「9:4-6【主】は彼にこう言われた。「都の中、エルサレムの中を行き巡り、ここで行われているすべての忌み嫌うべきことを嘆き悲しんでいる人々の額に、しるしをつけよ。」<sup>5</sup> また、私が聞いていると、ほかの者たちに主はこう言われた。「この者の後について都の中を行き巡って、打ち殺せ。あわれみをかけてはならない。惜しんではならない。6年寄りも、若い男も、若い娘も、幼子も、女たちも殺して滅ぼせ。しかし、しるしが付けられた者には、だれにも近づいてはならない。まず、わたしの聖所から始めよ。」そこで、彼らは神殿の前にいた老人たちから始めた。」同じように、ここ黙示録7章でも、神の裁きが地上に降る前に、神のしもべとして印を押される人々がいるのです。

印というのは、聖書が書かれていた時代、権威や所有権を持っているしるしとして使われていました。私たちクリスチャンは、このような印を神によって押されています。第二コリントにこうあります。「1:21-22 私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。22 神はまた、私たちに証印を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。」キリストにあつて、私たちは神に堅く保たれています。私たちが永遠のいのちの約束を受け取るまで、私たちを守ってくださっています。そして、証印を押されているということは、聖なる者とされていることを意味します。「エペソ 4:30 神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」神が同じように私たちを守ってくださいます。そして責任として、私たちは神の悲しまれるものから離れないといけません。

## 2B イスラエル十二部族 4-8

<sup>4</sup> 私は、印を押された者たちの数を耳にした。それは十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者が印を押されていた。<sup>5</sup> ユダ族から一万二千人が印を押され、ルベン族から一万二千

人、ガド族から一万二千人、<sup>6</sup> アシェル族から一万二千人、ナフタリ族から一万二千人、マナセ族から一万二千人、<sup>7</sup> シメオン族から一万二千人、レビ族から一万二千人、イッサカル族から一万二千人、<sup>8</sup> ゼブルン族から一万二千人、ヨセフ族から一万二千人、ベニヤミン族から一万二千人が印を押されていた。

印を押された神のしもべたちは、「十四万四千人」おり、彼らは、「イスラエルの子らのあらゆる部族」であります。みなさん、「十四万四千人」について、多くのことを聞くかと思います。いろいろなキリスト教異端やカルト宗教が、自分たちのグループが十四万四千人であると言っているからです。エホバの証人がその有名なグループの一つです。ここで彼らを反駁しようと、一生懸命、聖書研究書などを使って汗をかかないでください。非常に簡単だからです。「イスラエルの子らのあらゆる部族」と書いてあるのですから、「イスラエルの子らのあらゆる部族」なのです。こんな簡単なことはありません。

主は、ご自分の救いの完成を、異邦人に対する救いの後に、イスラエルに働きかけるようにされます。「ローマ 11:25b-26 イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、26 こうして、イスラエルはみな救われるのです。「救い出す者がシオンから現れ、ヤコブから不敬虔を除き去る。」異邦人の完成があって、その後でイスラエルが救われると書かれています。エレミヤ書には、大患難のことを「ヤコブには苦難の時(30:7)」と書かれています。教会が福音をユダヤ人に語っている時は、一部の者たちしか信じません。それでも、ユダヤ人またイスラエル人の中から信仰を持つ人々が増えています。しかし、教会が取り上げられて地上に居なくなる時に、主はイスラエルを再び取り扱われて、患難時代に彼らが苦しみを経た後に彼らを救われるという計画を持っておられます。患難の時代の初期に、このようにしてイスラエル人の中から、神の証しをする者たちを選ばれ、他の人々の救いへと導く器としてくださっているのです。

十二部族の各部族が、それぞれ一万二千人います。ここで気づくことは、一部族が抜けてしまっていることです。ダン部族がいません。実は、このことは今に始まったことではなく、イスラエル十二部族が始まって以来起こっていることなのです。ヤコブに 12 人の息子が生まれました。その中の一人がヨセフですが、彼は兄たちによってエジプトに売られてしまいました。けれども主が彼とともにおられ、ヨセフはファラオの次に権力を持つ支配者となりました。そこで彼は二人の息子を生まれました。マナセとエフライムです。ヤコブは晩年二人に手を置いて、祝福しました。これは、ヨセフの息子がそのままヤコブの息子としての相続を受けるという意味です。ですから、ヨセフから二部族が出てきました。マナセ族とエフライム族です。ですから、合計すると 13 部族なのです。

けれども面白いことに、イスラエルの部族がすべて列挙されているときは、必ず 12 部族だけが列挙されます。そこでどこかの部族が、ここ黙示録 7 章にあるように省略されているのです。ある時はシメオン族が抜けています(申命記 33 章)。ここでの目的は、「十二」というイスラエル共同体

のまとまりを残しておくためです。ここではあたかも、ダン族が退けたらたように見えますが、エゼキエル書 48 章にはダンへの割り当て地がありますから、彼らは退けられていません。これは、新約聖書の使徒行伝においても同じことが言えます。イスカリオテのユダが自殺した後、ペテロが、くじを引かせて、マツティアを加えたので使徒が 12 人になりました。ところが、後にパウロが復活にイエスに会い、それで 13 人になっています。けれども、十二使徒なのです。

このことはおそらく、十二という数字が何らかの意味を持っているからであろうと考えられます。おそらく、この数字は「統治」を表しており、神の統治を象徴しているのではないかと思います。ですから、各部族の人数も、ここでは 1 万 2 千人と 12 の数字であり、1 万 2 千人が 12 部族あるということで、神が支配されている、しもべたちを強調しています。そして実際に、14 万 4 千人の神のしもべが、患難時代が始まった時に現われるでしょう。

## **2A 大患難から抜け出た人たち 9-17**

### **1B 救いを喜ぶ大群衆 9-12**

<sup>9</sup> その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。<sup>10</sup> 彼らは大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」

ヨハネは再び、「私は見た」と言っています。彼らは、「すべて国民」であり、すべての部族であり、民族であり、国語からの人々を形成しています。バベルの塔において、一つの民で一つの言語であった人間は、ばらばらにされて地に散らばっていき、民族や国々を形成しはじめました。そこで主はアブラハムに対して、「創世 12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」と約束されました。すべての国民、すべての民族、すべての国語の人々が祝福を受けます。そしてイエスさまは、弟子たちに、「あらゆる国の人々を弟子としなさい。(マタイ 28:19)」と命じておられます。主は、このようにあらゆる国民や民族、国語の者たちに強い関心を持っておられて、救うことを願っておられます。

この群衆が誰かと言いますと、14 節に出て来ます。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」とあります。つまり、患難の時代に信仰をもった人々であります。患難の時代にも、信じる人々がいます。けれども、すぐに殉教しなければいけない定めです。

彼らは、おそらくは、先の 14 万 4 千人の神の僕の宣教の働きによって、彼らが信仰を持ったのではないか？と思われる。かつてイスラエル十二部族が、異邦人に対して世界の光となるよう召命を受けていたように、今、その働きを行なっています。ユダヤ人は、ローマによるエルサレム破壊によって世界に離散しました。イスラエルが建国しましたが、それでも世界に散っています。

そうした彼らは、その国の言葉を語ります。そのまま、贖われたイスラエル人として離散の地で、そこにいる異邦人に福音を語る事ができるでしょう。

そして彼らは、「白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。」とあります。白い衣については、後でその意味の説明があります。そしてなつめ椰子の枝は、イエス様がろばの子に乗られて、エルサレムに入ってこられたときに、群集が「ホサナ」と言って出迎えたときに、用いられたものです。これはメシアが来られて、自分たちを救ってくださったことを喜びお祝いしているのです。そして、彼らは地においては苦難と殉教にあいましたが、今、天においてまことの救いを得ることができ、その喜びの中でなつめ椰子の枝を持っているのです。

「御座の前と子羊の前」とあります。彼らは今、天の御座の前にはいるのですが、今、そこに立つことができているのです。思い出してください、地上においては小羊の怒りを見て、もう耐えられない、そこに立つことはできないと嘆いている者たちの姿があります。しかし、彼らは同じ御座なのに、そこに大胆に立つことができ、そして恐怖ではなく、反対に慰めと救いの中で喜んでいいるのです。今やキリスト・イエスが流された血潮によって、清められているからです。

そして 10 節で、「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」と叫んでいます。彼らは、肉体においては殺されました。しかし、彼らの救いは、そういった肉体の命にありませんでした。私たちは、いろいろなものに救いを求めます。しかし、彼らは、神と子羊にこそ救いがあると叫んでいます。

<sup>11</sup> 御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物の周りに立っていたが、御座の前にひれ伏し、神を礼拝して言った。<sup>12</sup>「アーメン。賛美と栄光と知恵と 感謝と誉れと力と勢いが、私たちの神に 世々限りなくあるように。アーメン。」

御座があって、その回りに 24 人の長老たちがいたことを思い出してください。それから、四つの生き物、おそらくケルビムがいましたね。そして、こうありました。「5:11 また私は見た。そして御座と生き物と長老たちの周りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の数万倍、千の数千倍であった。」今、これだけの大群衆が主に対して救いを喜んでいたので、無数の御使いたちも、神の前にひれ伏して、礼拝しているのです。

## 2B 神の前にいる慰め 13-17

<sup>13</sup> すると、長老の一人が私に話しかけて、「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と言った。<sup>14</sup> そこで私が「私の主よ、あなたこそご存じです」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」

24 人の長老たちの一人が、ヨハネに質問しています。白い衣を着ている人はだれか、という質問です。けれどもこれは、本当は質問ではありません。次の節で、質問しておきながら自分で答えています。ヨハネに、この白い衣を来た、あらゆる国からの、かぞえきれない群集がだれかに注意を引き寄せるためです。そして、先ほど話しましたように、教会が天に引き上げられることによって、神の救いの働きが終わるわけではありません。患難時代にも続きます。患難時代においても、主の名を呼び求める人たちがおり、彼らも救われるのです。

そしてこの節には、「その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」とあります。先ほどの白い衣の意味がここに書かれています。白い衣は、キリストの血による罪の赦しであり、罪のきよめです。イザヤはこう預言しました。「1:18 「さあ、来たれ。論じ合おう。——【主】は言われる——たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」キリストの血は、強調してもしすぎることはありません。私たちが何か過ちを犯したときに、その過ち、あるいは罪を償おうとするのですが、行ないによって償おうとします。自分の心の罪意識を、なんとか償いたい、贖いたい、そして払拭したいと思うからです。けれどもそれでは、決して拭い去ることはできません。しかし、主イエス・キリストの血であれば、完全に私たちの心をきよめることができます。「ヘブル 9:14 まして、キリストが傷のないご自分を、とこしえの御霊によって神にお献げになったその血は、どれだけ私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者にすることでしょうか。」ですから、彼らは小羊の血によって白くされました。

<sup>15</sup> それゆえ、彼らは神の御座の前であって、昼も夜もその神殿で神に仕えている。御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られる。<sup>16</sup> 彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も、彼らを襲うことはない。<sup>17</sup> 御座の中央におられる子羊が彼らを牧し、いのちの水の泉に導かれる。また、神は彼らの目から 涙をことごとくぬぐい取ってくださる。」

天における安息と祝福がここに記されています。七つ、書かれています。第一に、主の間近に行けるという祝福です。「神の御座の前」にいとあります。主に急接近するという、恵みにあずかります。第二に、奉仕において祝福があります。「聖所で昼も夜も、神に仕えているのです」とあります。天でありますから、夜があるわけではないのですが、ここは夜の時に眠らなければいけないような、疲れを感じることは、天においてはありません。主に仕える喜びに満ちています。第三に、交わりの祝福があります。「彼らの上に幕屋を張られる。」とあります。幕屋というのは、親密さを示しています。イサクが亡き母サラの天幕に、リベカを入れたことが書かれていますが、そのように親しさの中に入ることを意味します。イエス様が人となられたのは、ひとえに私たちの間に幕屋を張られるためであることが、ヨハネ 1 章 14 節に書いてあります。

第四に、必要が満たされる祝福です。「飢えることも渴くこともなく」とあります。彼らは患難の中で飢えて、渴きに襲われていましたが、もはやその苦しみはなくなります。第五に、安全の祝福で

す。「太陽もどんな炎熱も、彼らを襲うことはない。」とあります。イザヤ 49 章 10 節や、詩篇 121 篇 5-6 節にも、同じ約束がありますが、これは荒野の旅をしていたイスラエル人など、切実な問題でした。そして患難時代において、その後半で獣の住民が太陽の炎熱で焼かれていくという災いがあります。今も、天候の不順でしばしば、太陽の炎熱の問題が世界で出てきていますが、それが格段に酷くなることでしょう。彼らはそれから守られます。そして第六に、導かれる祝福があります。「御座の中央におられる子羊が彼らを牧し、いのちの水の泉に導かれる。」とあります。不案内によって、不安に陥ったり、迷うことはなくなくなります。詩篇 23 篇にある羊飼いと主、そしてヨハネ 10 章にある良き羊飼いやイエス様の姿であります。そして、第七の祝福は、慰めの祝福です。「神は彼らの目から 涙をことごとくぬぐい取ってくださる。」とあります。

いかがでしょうか、このようにキリスト者にとっての慰めの約束が、患難時代の聖徒たちにも約束されています。地上においては殉教という苛酷な試練を通りましたが、天において慰めを受けます。彼らは神の御前にあるということで、喜びを感じています。これが、キリスト者の慰めであり、罪に対する私たちの悲しみです。怒りではなく悲しみ。しかし、天にある望みがあり、そこに喜びがあります。